

# ALSに砕かれたアメリカンドリームと連続出場記録

(ALS：筋萎縮性側索硬化症の略称)

映画・医療ライター 小 守 ケ イ

「今日は三振が3つ。9回裏満塁の時もだった」。1938年秋のNY。34歳のNYヤンキースの主将、4番打者で一塁手のゲーリックが帰宅し、渋い顔で妻に告げる。今日は2000試合連続出場記録を達成した記念の日なのに…。

妻は一瞬、顔を曇らせるが、すぐに明るく記念品の花輪をちぎり、「高熱や骨折、死球でも出場し続けたわ」と夫に祝福の花シャワー！ゲーリックも思わず笑顔を見せるが、そのうち突然、苦しげな表情に。

「貴方！どうしたの?」。ゲーリックは「肩をひねったようだ。試合中も気になって、それで三振を」と腕や手を撫ぜたり叩いたり、また、バットを振ってみたりして首を傾げる。

映画「打撃王」の主人公は、20年代後半から30年代に生涯打率3割4分、三冠王、MVP、2130試合連続出場などの記録に輝いた初代“鉄人”、ルー・ゲーリック(1904～1941)。貧しい移民家庭に生まれた彼が、母の教えの“この国では努力すれば誰でも出世できる”の下に努力を重ねて栄光の座を掴み、その後、襲われたALSも一層の鍛錬で克服しようと懸命に生きた姿を描く。ゲーリックには往年のハリウッド二枚目スターのゲーリー・クーパー、チームメイトにはベーブ・ルースなどが本人役で出演。

## 運動神経の傷害から呼吸筋マヒに



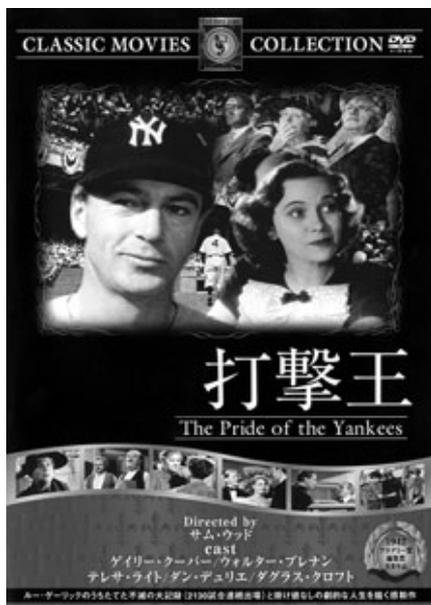
ALSは壮年期に突然発症し、運動神経だけに起きる障害が徐々に全身に進行して、死に至る原因不明の病気。10万人に1～2人程度で男性に多く発症し、3年から5年で死亡することが多い。初発症状はゲーリックの場合は手や腕の違和感だったが、ろれつが回らない、むせる、筋肉のツッパリ、ピクツキなど様々で、徐々に手足の力が弱まって動かなくなる。やがて全身の筋力低下から食べた物が飲み込めない、声が出ない、ついには呼吸もできなくなる。一方、感覚神経や自律

神経などは侵されないので、知能、眼球運動、尿意、便意などは正常に保たれる。従って全身の運動機能が障害されても、経管栄養や人工呼吸器により或る程度の延命も可能だ。しかし、その選択も患者本人の意志次第なので残酷だ。

## 足もおかしい、走れない…



翌39年の春季キャンプ。ゲーリックは球やバットの握りが一層悪くなり、さらに足の筋肉もおかしく踏ん張れない。「どうしたのか?」。危



Golden Age Entertainment Int.  
発売元：(株)ファーストトレーディング  
写真：ゲーリックと妻のエレノア

## 映画「打撃王」

サム・ウッド監督、1942年、米国

機感を抱いた彼は、練習強化で体調を整えようと一人黙々と夕暮れのグラウンドを走り込む。

しかし、いくら練習をしても足はもたつき、コケそうになる。そのうちヒットを打っても塁に走り込めず、守備では投手が1塁に投げようにも1塁手のゲーリックが塁に戻っていない。彼の変貌は誰の目にも明らかになり、新聞には連日「ゲーリック、大スランプ!」と大見出し、街では「あれでも野球か!金返せ」との声。チーム内でも「アイツのせいで負けたんだ」。

### 「もう無理だ、代えてくれ」

5月の対デトロイト・タイガーズ戦。不安げにグローブやバットの感触を確かめていた彼は、ついに自ら交代を願い出る。すぐに「一塁ゲーリック、交代」とアナウンス。連続出場記録は2130試合で途絶えた。

1ヵ月後、ALSと診断されたゲーリックが「真実を教えてください。アウトですか?」と尋ねると、医師は「残念ながらアウトだ」と応じ、「では余命は?」には返答に窮し、彼は引退を決める。

7月4日、大リーグ初の引退式。手足の違和感から約1年、ネクタイも結べなくなった彼に妻が寄り添い球場へ。「蛍の光」と大観衆のスタンディング・オベーション。「僕は世界一幸せな男です」と感謝の言葉を残して去って行った。

### 37歳で逝った鉄人、病に名を残す

映画は引退で幕が下りるが、実際の彼は歩ける間は観戦し続け、引退の2年後、37歳で死去。

その後、未亡人がALS協会活動に熱心に取り組んだが、ALSは未だに原因も解明されていない。近年ではTDP43という蛋白の神経への異常集積が原因という説もあるが、確定的ではない。従って根治療法もないので、リハビリ、誤嚥を防ぐ食事療法、呼吸筋マヒには人工呼吸が行われる。死因は肺炎などの感染症が多い。

本作の製作は、彼の死の翌年の42年。彼をアメリカンドリームの実現者として大仰なほど明るく描く映画は、ファンにはさぞ良き癒しになっただろう。しかし今では、その明るさと病気の悲劇性との落差が大き過ぎて、むしろ病気の深刻さが余計に浮き立つ。今もゲーリック病ともいわれるALS、さらに研究が進めば彼も浮かべられるだろうが…。

監修：東京通信病院 副院長・内科部長 みやざき 宮崎 しげる 滋

